

教育学研究科・グローバル教育展開オフィス

溝脇 風子・教育認知心理学コース

国際学会：SPSP 2025 Annual Convention

参加地・期間：Denver, Colorado, the United States of America・2025年2月20日～22日

発表題目：Unraveling the Japanese Mixed Emotion “Setsunai”：
How Psychological Distance and Comprehensive Cognitive Style
Shape Bittersweet Sadness

成果の概要

私は、アメリカのデンバーで開催された SPSP 2025 Annual Convention のプレカンファレンスにおいて、混合感情である切なさ感情の生起に心理的距離と包括的認知様式が影響を与えるかを検討した実験をポスター発表しました。発表では、切なさ感情と類似する混合感情である saudade の研究者にその類似性を説明したり、美的感情の研究者と、悲しみと甘い気持ちが似たような状況で同時に高まる現象の興味深さについて議論したりしました。また、シンガポールの研究者から、シンガポールにはそのような混合感情を表す言葉がないことを聞いたり、今回対象とした「失恋」以外の状況、例えば警察官や教員などの職場の異動が切なさを喚起しうるのではないかという指摘をいただいたりしました。こうした交流を通じて、本研究に関連するさまざまな視点を持つ研究者と意見を交わし、今後の研究の発展可能性を考えることができました。日本以外の研究者に「切ない」という感情の存在を伝える機会、それが文化の研究者にとっての客観的な視点を得られる機会は、このような国際学会でしか得られないものであり、非常に有意義でした。

また、ほかの発表を聴講し、多くの研究者と交流しました。私の現在の主な研究テーマである偏見・差別に関しては、怒りの感情が重要な要因となることや、growth mindset が自己効力感を高め、不安を軽減し、外集団を避ける行動を抑制すること、対人関係において共感を呼び起こすメッセージが差別の低減に有効であることを学びました。さらに、偏見に影響を与える環境要因として、普段視聴しているニュースを指標化し調査することで検討できること、一般に知り合いの知り合いにその集団の成員がいるかどうかは集団に対する感じ方に影響するが、単にその数だけでは影響がみられないこと、社会集団の道徳への支持度が非伝統的な社会集団に対する寛容性を低下させることなどについても知見を得ました。学会では、偶発的にたくさんの知識を得られることがとても大きな利点だと思います。これらの学びは、私が今後取り組む予定の、個人の偏見や差別の程度を説明し、それらを低減する方法の効果を示すモデルの構築において、重要な要素として考慮していく予定です。

会場は非常に活気があり、研究者同士の交流も盛んに行われていました。自身の発表について説明するだけでなく、それを深く理解し発展させるための建設的な質問も多く寄せられ、実りのある有意義な議論ができました。社会心理学・パーソナリティ心理学に関わる様々なテーマが同時に発表されていたため、自分の研究に直接に関わりそうな研究と、普段は自分から調べないけれども間接的に自分の研究にいつか生かすことができそうな研究の両方に触れることができました。今回のご支援のおかげで、初めて国際学会に参加し、このような貴重な交流の場を得ることができたことに、深く感謝しています。

今後の研究においては、今回得た研究知識を活かして、より広い視点から研究を深めていくとともに、伝わりやすい発表の仕方や積極的な研究交流の姿勢も大切にしていきたいと考えています。発表の仕方として、初めて聞く研究内容でも、結論が簡潔にまとまっている発表は理解しやすく印象に残りやすいと感じたため、自身が発表を行う際も、重要なメッセージを簡潔に示すことを心がけたいと思います。また、研究を聴講する際には、ただ説明を受動的に聞くだけでなく、疑問に思ったことや興味を持った点を積極的に質問したり、自身の研究や知識との関連について共有したりすることで、新たな発見や考察が生まれることを実感しました。ポスター発表だけでなく、シンポジウムでも質問が絶えないことが印象的でした。私自身の姿勢に今回の学びを取り入れ、今後もこのような学会や研究発表の場への積極的な参加を続けていきたいと考えています。